

The Longest Journey に見る精神性の敗北

原 田 靖 也

この小説は主人公であるリッキー (Rickie) の短い人生における混乱と迷走と空虚さを描き、そのタイトルはシェリーの「エピサイキディオン」にある “The dreariest and the longest journey go” からとられていて、まさしく主人公の人生に相応しいタイトルだと言える。フォースター自身はこの小説を地霊との出会いをテーマであると言い、トリリングは「結局彼は救われるが、寛大さに戻ってまた実在しない物を求めて破滅した^①」と言うように、目に見えない、実在しない物がリッキーと彼の周辺の人間の人生に大きく関わってくる。

作品自体は3部構成となっていて第1部がケンブリッジ (Cambridge)、第2部がソーストン (Sawston)、第3部がウィルトシャー (Wiltshire) である。3部それぞれが独自の雰囲気を持っていて、それぞれの特定の場所には意味を持った場所があり、それぞれの場面を代表するような人物を通して描かれる。本論ではこの精神的な物に視点を置き、リッキーが破滅するに至る過程で、実在しない物、つまり精神性が彼に与えた影響を見て、その結果として彼が実在をどうとらえたかを見ていく。

リッキーは小説を書くという文学的な才能を持ち、生まれつき足が悪いために現実に対して少々気後れしている青年として描かれている。学生であるリッキーにとってケンブリッジは知性を表す場所であり、小説の冒頭では彼の部屋に集まった仲間がアンセルという人物を中心に牛をテーマにして、「見る人がいなくても事物は存在するのか」という実在と認識についての議論がなされている。だが、このような日々交わされる問答を理解しきれない彼にとっては、知性と同時に空虚さをも表す場所であるといえる。

この議論の最中に部屋に入ってくるのがリッキーの旧知のアグネス・ベンプルックである。アンセルはアグネスを見て、そしてリッキーが彼女に惹かれていることに気が付きこう言う。

Did it never strike you [Rickie] that phenomena may be of two kinds: one, those

which have a real existence, such as the cow; two, those which are the subjective product of a diseased imagination, and which, to our destruction, we invest with the semblance of reality? If this never struck you, let it strike you now.^②

アンセルはアグネスを見て、リッキーが『病んだ想像力による見せかけの实在』をアグネスに被せていることに気が付く。しかし、同時にすでにリッキーはアンセルがこのように言わなければならない状態であるということでもある。

そんなリッキーにとって第1部ケンブリッジにおける特定の場所とは、近くにあるマディングレー (Madingley) の谷と、叔母の住むキャドヴァー (Cadover) にあるキャドベリー・リングズ (the Cadbury Rings) がそれである。

マディングレーの谷に関しては、“...the dell became for him a kind of church”^③とあり、気に入らない人すら連れて行ったというその場所は神聖であり、ケンブリッジの空虚な灰色と比べて生き生きとした色彩豊かな場所として描かれている。

The sky itself was of the palest blue, paling to white where it approached the earth; and the earth, brown, wet and odorous, was engaged beneath it on its yearly duty of decay. Rickie was open to complexities of autumn; he felt extremely tint-extremely tiny and extremely important; and perhaps the combination is as fair as any that exists. He hoped that all his life he would never be peevish or unkind.^④

リッキー自身が無意味さを感じる哲学的な議論とは正反対のこの谷は、自らを認識するために重要な場所である。この場所にいる時、彼は実在する物、つまり人間の美しさを感じている。リッキーはアンセルに勧められ、その時周りにいた友人たちに初めて両親を亡くした自分の過去について話をするのもこの場所である。

リッキーは愛情を持たない父親と愛情豊かな母親に育てられ、次第に父親を憎むようになっていく。しかし物語が始まるずっと以前に両親とも世を去っている。その愛情の欠落が彼の人生に大きな影響を与えていることは明かである。

後にリッキーは旧知のアグネスを連れてこの谷を訪れて、この時リッキーは自分が書いている物語をアグネスに聞かせている。その物語は男が美しい娘に恋をするがその娘はドリュアス (木の精) だったという内容で、ここでアグネスとドリュアスが重ねられている。

“Did you [Rickie] take me [Agnes] for the Dryad?” she asked. She was sitting down

with his head on her lap. He had laid it there for a moment before he went out to die, and she had not let him take it away.

“I prayed you might not be a woman,” he whispered.^⑤

かつてここで実在する物の美しさを感じていたリッキーだが、この場面ではアグネスの存在を否定している。“...she is the dominant figure, as she folds him in her arms”^⑥ というように、アグネスはリッキーに対する支配を強めていっているが、支配される側のリッキーは実在のアグネスではなくドリュアスとしての彼女に惹かれている。リッキーがこのような幻想を抱くのは、かつてアグネスとその恋人のジェラルドの情熱的なキスを目撃してしまったからで、それがリッキーにとっては素晴らしいものと思えてしまったからである。アグネスにジェラルドというたくましい恋人がいた時、彼女はジェラルドに支配されることを望んだ。しかし突然の事故によってジェラルドが死んでしまい、それはかなわなくなっていた。

Agnes is conventional, snobbish, hard. Rickie is second-best for her; he [Rickie] cannot continue to arouse her imagination by his insight and certainly not by his sexuality. She must be dominated or dominating, and her notion of dominance is mixed up with some notion of brutality. She is not dominated, therefore she becomes dominant and thus she deteriorates. We move into a new moral dimension with this situation, for Agnes, Forster points out, is helped toward her deterioration by Rickie's very virtues which kept him from mastery.^⑦

ここで分かるのが、リッキーが墮落する原因はアグネスだけにあるのではなく、彼自身の中にもあるということである。アグネスをドリュアスの化身として、実在と切り離してしまったことにより、実在する人間として彼女を見ることができず、彼の美德であるはずの支配しないことが逆に働いている。ここではアグネスもリッキーを実在のリッキーとは受け入れず、単にジェラルドの代替品、しかも力強く彼女を支配する人間ではなく、彼女に支配される対象としてしか見ていない。リッキーが見ているアグネスも、アグネスが見ているリッキーも、実際に互いを見ているわけではないと言える。アグネスを連れてくるまでは神聖な教会であり、自らを認識する場所であったこの谷は、『病んだ想像力による見せかけの存在』をかぶせて身の破壊を招くというアンセルの忠告と一致する。

もう1つの場所であるキャドベリー・リングズはさらに人と場所と精神性の関わりが強く表れていて、この小説の中心というべき場所である。リングズを象徴する人間は野生児のスティ

ーヴンで、彼は実在を象徴する人物として、アグネスとは対比されて描かれている。リングズは2つの輪に囲まれて中央に1本の本が立っている場所で、リッキーはここで失神することになる。リッキーが婚約者のアグネスを連れて叔母であるフェイリング夫人の家を訪れていた時にリングズへ出かけた場面でそれは起こる。教会の鐘が「パン」という音を立てた後でスティーヴンが彼の腹違いの弟だと教えられ、あまりのショックに彼は気を失う。

But he [Rickie] heard her [Mrs Failing] no longer. He was gazing at the past, which he had praised so recently, which gaped ever wider, like an unhallowed grave. Turn where he would, it encircled him. It took visible form: it was this double entrenchment of the Rings. His mouth went cold, and he knew that he was going to faint among the dead. He started running, missed the exist, stumbled on the inner barrier, fell into darkness-^⑧

意識を取り戻しかけたリッキーは全てを受け入れようとする。

There broke from him a cry, not of horror but of acceptance. For one short moment he understood. "Stephen-"he began, and then he heard his own name called: "Rickie! Rickie!" Agnes had hurried from her post on the margin, and, as if understanding also, caught him to her breast.^⑨

リッキーが意識を取り戻した時、彼を抱き起こしたのは彼が呼びかけようとしたスティーヴンではなくアグネスだった。スティーヴンという人間を受け入れて自分の元へ呼び寄せようとした時に間に割り込んだのがアグネスという図式になる。マディングレーの谷はリッキーにとって神聖な教会であり、キャドベリー・リングズも近くの教会から鐘の音が聞こえてきて、この両方とも教会を暗示する場所であり、その両方でリッキーが実在を受け入れるのをアグネスが妨げたのである。

このキャドヴァー滞在の山場となるのが、アグネスに向かって言うリッキーの言葉である。

It seems to me that here and there in life we meet with a person or incident that is symbolical. It's nothing in itself, yet for the moment it stands for some eternal principle. We accept it, at whatever cost, and we have accepted life. But if we are frightened and reject it, the moment, so to speak, passes; the symbol is never offered

^⑩
again.

スティーヴンが彼の腹違いの弟であるとフェイリング夫人から教えられ、そしてスティーヴンにこの事実を教える義務があるとアグネスに説明する部分である。アグネスがリッキーを制止したためリッキーは思いとどまるが、これで最初の象徴的瞬間は過ぎ去ってしまう。

リッキーがスティーヴンを父親の血を引いていると思い込んだのはスティーヴンの普段の行動における野蛮さが目に付くからで、実際リッキーは死んだ父親を冷酷な男として嫌っていた。そのため、スティーヴンの野蛮さを嫌いになるというよりも、父親の血を引いているという方がリッキーにとっては意味があったのである。つまり、この時のスティーヴンは、反モラル的なものの象徴とリッキーの目には映っていたはずで、実際のスティーヴンを見ていたとは言い難い。

ただ、事実は事実として受け入れようとするリッキーの目論見はアグネスによって阻まれる。

Then she fought the fantasy on its own ground. "And, by the bye, what you call the 'symbolic moment' is over. You had it up by the Rings. You tried to tell him. I interrupted you. It's not your fault. You did all you could."^⑪

アグネスはフェイリング夫人を通してスティーヴンを海へ行かせることに成功し、リッキーの先手を打ったのだった。アグネスの思い通りになりそうな時、タバコを取りに戻ってきたスティーヴンが窓の外から話しかけた。3回呼びかけ、もう1回呼んだら返事をしようとリッキーは考えたが呼ばれることはなかった。ここで、返事をするしないという選択肢は彼の手の中にあるのである。「もう1回呼んだら」と考える時点で、リッキーは自ら望んでスティーヴンと接触を持つ機会を放棄したのではないだろうか。

アグネスと結婚したリッキーは、アグネスの兄であるハーバート・ペンブルックの勧めでパブリック・スクールの運営という実利の灰色な世界に入る。

The same routine, the same diplomacies, the same old sense of only half knowing boy and men-he [Rickie] returned to it all; and all that changed was the cloud of unreality,^⑫ which ever brooded a little more densely than before.

この非現実の雲 (cloud of unreality) はソーストンにいたために彼の上に垂れてきたのであろうが、ソーストンが直接の原因であるとは言いきれない。むしろ、ソーストンでの生活を

受け入れたリッキー自身がもたらした雲だと考えられる。ただ、ソーストンにいたからこそであり、こういう場所はソーストンに限らずこの作品に存在する。そういう場所にいる盲目の大衆であり、これらの人達は急激な変化を良しとせず、この作品に限らずフォースターの他の作品にも中産階級という形で現れる。逆に盲目の大衆でない人物は非常に少ない。

そのうち、フェイリング夫人の夫で故人であるフェイリング氏は理想を持って行動に移した人である。以下はアンセルが読んでいるフェイリング氏の『評論集』へのコメントである。

However, Mr Failings stuck to his guns, such as they were, and fired from them several good remarks. Very notable was his distinction between coarseness and vulgarity (coarseness, revealing something; vulgarity, concealing something), and his avowed preference for coarseness. Vulgarity, to him, had been the primal curse, the shoddy reticence that prevents man opening his heart to man, the power that makes against equality. From it sprang all the things that he hated - class shibboleths, ladies, lidies, the game laws, the Conservative party - all the things that accent the divergencies^⑬ rather than the similarities in human nature.

これがフェイリング氏の信念である。盲目の大衆はそうでない人間の中に相違点を見つけようとする。そして見つけたときには自分たちと同じようにさせることを美德であると考えている。一方でフェイリング夫人は夫と正反対の人物で盲目の大衆の一員と描かれ、フェイリング氏が生前に行ってきたことを無に帰そうとしている。また、夫の死後出版の評論集の序文を書きながら、その内容に関しては皮肉っている。

アンセルはフェイリング氏に近い感性を持ち、非常に洞察力が鋭く、アグネスを一目見て本質を見抜いたのは彼である。が、それだけではなく、場合によっては力を示すことがあるとリッキーに言ったことがある。リッキーがソーストンを去ることになるのはアンセルが力を見せたからである。

このソーストンの生活もアンセルがリッキーに会いに来たこと、スティーヴンがキャドヴァーを追い出されてリッキーを訪ねてソーストンに来たことで終わりとなる。スティーヴンはリッキーの異父弟ではなく異母弟であるということと同じくソーストンに来ていたアンセルに話す。スティーヴンがそれを知ったのはフェイリング夫人から渡された手紙によってであり、アグネスはスティーヴンを金で懐柔しようとする。スティーヴンという実在する人間を見ようとしないリッキーに対し、アンセルはこの事実を寄宿舎の食堂で、生徒の前で言うわけだが、事実を知ったリッキーはスティーヴンを弟として受け入れることができると同時にソーストンか

ら離れてアグネスから解放される。

だが、かつてスティーヴンの中に父親の幻影を見ていたのが、今度はスティーヴンの中に母親を見るようになっただけで、ここでもスティーヴン自身を見ているわけではない。つまり、「邪悪な父親の血を引くスティーヴン」から「母親を通して見る高い精神性を持ったスティーヴン」に変わり、アンセルの言う病んだ想像力による主観的産物になっている。

スティーヴンはフェイリング氏の生前は彼が保護者になり、死後はフェイリング夫人が保護者となっていた。野生児であるが読書を好み、金銭で友達と衝突してはフェイリング夫人に肩をひそめさせる。ただ、その精神の高潔さは彼の正直な性格から来ていて、誰とも対等に付き合うことができる。それゆえ、相変わらず酒を飲んで暴れるスティーヴンに悩むリッキーがなんとか説得を試み、スティーヴンも禁酒を約束するが、ある夜に酒を飲んでいるスティーヴンを見てリッキーは破滅に直面する。

There is no resolution to Rickie's dilemma within the conceptual emotional schema of The Longest Journey. Rickie's consciousness remains disunified - torn within the system of differences in which he must live but to which he can not 'adapt.'¹⁴

酔っぱらったスティーヴンが彼の目には映らない。同行していたフェイリング夫人の執事レイトンは単純にスティーヴンが酔っぱらっていると認識するが、彼にとって人間が実在するのは当然である。リッキーにとってはスティーヴンの中に見る母親が冒瀆されたと感じていた。盲目の大衆の一員であるフェイリング夫人からは、「アグネスと仲直りして世の中の慣習に従い、大地に注意しなさい」と言われていたが、大地を表す自然児スティーヴンによって破滅を迎えたリッキーにとっては、「アグネスと仲直りして世の中の慣習に従う」ことしか残されていない。それは再び非現実の雲に覆われる墮落を意味する。そして酔っぱらったスティーヴンを探しに行き、線路の上で寝ていたスティーヴンを発見して彼を助けるが、変わりに自分の命を失う。ただ、リッキーは「人としての責任」からスティーヴンを助けたのであって、破滅した彼自身は救われなかったと思っていた。

リッキーはスティーヴンを肉体的存在ではなく精神的存在として見ていたために破滅を迎えるのだが、リッキー自身、自分は救われたいし救われようとも思わなかったのに対し、死の直前に彼はスティーヴンを肉体的存在として受け入れたことにより正当化されて救われている。それによりフェイリング夫人が注意するように言った「大地」を表すスティーヴンも正当化され、救われたと言える。

小説の冒頭で学生たちがしていた実在と認識についての議論を聞いていたリッキーは途中で

それを無意味と考え、それ以上考えることをやめてしまった。その結果、彼は常に非現実を通してのみ人間を追い続け、死の直前に実在の意味を理解することになるのだが、死んだことにより、リッキーに命を救われたスティーヴンは結婚し、子供にはリッキーと自分の母親の名前を付けたという文章で終わっている^⑮。そしてそれが小説の最後で再度彼を救っている。リッキーが繰り返した間違いと盲信は彼を破滅に導いたかもしれないが、フォースターはこれを愚かなこととは見ておらず、盲信とはいえその高潔さがリッキーとスティーヴンの実在を最後に主張している。

註

- ① Lionel Trilling, *E. M. Forster*, Rev. Ed., New Directions, 1964, p.83
- ② E. M. Forster *The Longest Journey* (以下 *L. J.*), Penguin, 1989, p.17
- ③ *Ibid.*, p.18
- ④ *Ibid.*, p.19
- ⑤ *Ibid.*, p.73
- ⑥ Tony Brown, "E. M. Forster's Parsifal: A Reading of *The Longest Journey*", *E. M. Forster Critical Assessments*, ed. J. H. Stape, vol. 3, Helm Information, 1998
- ⑦ Lionel Trilling, *E. M. Forster*, p.90
- ⑧ E. M. Forster, *L. J.*, p.130
- ⑨ *Ibid.*, p.130
- ⑩ *Ibid.*, p.136
- ⑪ *Ibid.*, p.137
- ⑫ *Ibid.*, p.176
- ⑬ *Ibid.*, pp.207-208
- ⑭ Rae H. Stoll, "'Aphrodite with a Janus Face': Language, Desire, and History in Forster's *The Longest Journey*", *E. M. Forster Critical Assessments*, ed. J. H. Stape, vol. 3, Helm Information, 1998
- ⑮ E. M. Forster, *L. J.*, p.289

Bibliography

- Beauman, Nicola. *E.M.Forster: A Biography*. New York: Alfred A. Knopf, 1993
- Colmer, John. 1975. *E. M. Forster: The Personal Voice*. Boston: Routledge & Kegan Paul.
- Gransden, K. W. *E. M. Forster*. Edinburgh: Oliver and Boyd, 1962
- Lago, Mary. *E.M.Forster A Literary Life*. Cambridge: Macmillan Press, 1995
- Page, Norman, *E.M.Forster*. London: Macmillan Press, 1987
- Wilde, Alan. *Art and Order A Study of E.M.Forster*. New York: New York University Press, 1964